

自己評価の結果について

令和4年度4月公表
学校法人 北邦学園
認定こども園
札幌自由の森幼稚園・保育園

令和3年度に実施した認定こども園札幌自由の森幼稚園・保育園の自己評価の結果の概要は、次のとおりです。

1 本園の教育目標

- ・ 思いやりのある子
- ・ たくましい子
- ・ 考える子

2 本年度、重点的に取り組む目標・計画

- ① 日々の保育環境やカリキュラムの見直しと工夫
～主体性と安全管理のバランスを考えて～
- ② 保護者理解と連携の強化
- ③ 安全管理・危機管理の視点での環境整備の継続
- ④ 職員間同士の協力、連携の強化

3 評価項目の達成及び取り組み状況

評価項目	取り組み状況
日々の保育環境やカリキュラムの見直しと工夫 ～主体性と安全管理のバランスを考えて～ <自己評価 A> 「玩具の見直しや遊びの環境作りの工夫」 「戸外遊びの充実」	<ul style="list-style-type: none">・0～5歳児に適した玩具について、2年前に学園として作成した資料に基づき、計画的に購入していくことができた。同時に、特に0～2歳児クラスでこれまで見られていた、本園の環境や年齢に適した玩具と意図が見えにくい玩具が混在している保育室等の状況が改善されてきた。ただし、様々な玩具を子どもの育ちに合わせ時期を見て用意するという環境作りの点では、年齢ごとに差があったため、さらに工夫が必要である。・これまで実施はしてきたものの定着が難しかった「森DAY」を、今年度「フリーデー」として年間予定に組み込み、週に1回のペースで実施することができた。これをきっかけに戸外遊びの時間を子どもたちのために十分に確保するという意識が職員間でも高まった。森の中で子どもたちの姿から、職員が「自然から学ぶ」の具現化を学んでいくきっかけにもなったため、そこに焦点をあてて本園の教育保育について話し合うことも、今後していきたい。

<p>「主体的な遊び場の確保」</p> <p>「安全管理を意識した園舎内外の環境整備」</p> <p>「乳幼児の相互理解」</p> <p>「絵本を通した取り組み」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度の園内研究により、遊戯室の環境設定をコーナーとして工夫することで子ども自身が場を決定し遊びの世界に入り込むことができたという結果が得られたが、それを続けることで子どもたちの自由な発想に制限がかかることがあったため、安全への意識をもちながらも主体性を発揮できる環境が失われないような環境作りについて、職員間で考えながら実行することが出来た。 ・森の中の野外ステージや大型ブランコ、砂工房近くの橋など、補修や新たな設置が必要なものは計画的に行うことができた。また、暴風で倒木の危険があるものは、あらかじめ伐採することができた。次年度以降も、定期的に行う必要がある。 ・一昨年まで少しずつ進めてきた乳幼児の交流（子ども、職員両方）だが、今年度はコロナ禍での感染拡大防止対策のために、様々な行事が年齢別での実施となり、積極的に交流をすることは難しく、子ども同士の交流としては、距離をとって互いの保育を見学し存在を感じ合うということに留まった。職員間でも、乳幼児の枠にとらわれない研修への参加はできたものの、互いの理解をどう進めていくかまだまだ工夫が必要である。コロナ禍で子ども同士の交流が難しいことが続くことを覚悟し、まずは職員間でできることを実施していきたい。 ・開始から4年目となる「絵本を通した育児支援の取り組み」（0・1歳児）では、一人ひとりと絵本を読む時間がより温かいものになるような援助はもちろん、友達と一緒に絵本を楽しむという姿も多く見られるようになった。また、新たに「えほんのおうち」（図書コーナー）を増設し、子どもたちが落ち着いて様々な絵本に触れられるような環境を整えた。「えほんのおうち」をより良く活用するには、これから工夫が必要だが、今年度は、子どもたちの絵本への興味関心や集中力、想像力、そして保育教諭の選書力や、絵本をただの手段ではなく大切に捉えていく力が育ってきていると感じる一年だった。
<p>保護者理解と連携の強化</p> <p><自己評価 B></p> <p>「園の教育保育に関わる積極的な情報発信」</p> <p>「ICTの活用」</p> <p>「迅速な情報提供」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・月に1回発行していたクラスだよりを廃止し、代わりに週1回在園児限定ブログを配信してきた。また、0.1歳児の連絡帳の内容については、コドモンアプリを使って配信してきた。どちらも写真つきでお伝えできるため、子どもたちの様子がわかりやすいと保護者の方からも好評をいただいた。 ・ICT（コドモンアプリ）を活用し、これまでの登降園管理の他、各種お便りの配信、欠席やバス連絡の電子化を行った。各種お便りの配信は、保護者の方にとって管理がしやすく好評いただいているが、アプリ内の見やすさや紙面を希望するご家庭への配慮については改善の余地があるため、今後工夫していきたい。また、アンケート機能を活用し、行事の内容や緊急事態宣言下での出欠などについて、保護者の方の意向を確認し、集計して園運営に活かしていくことができた。以上の内容について、保護者の方も簡単に返答でき、かつ、職員の負担を減らすことができた。 ・先々の予定をなるべく早くお知らせすることができるよう、月の予定を1か月前倒して配信したり、配信する量やタイミングを工夫するなど改善できた部分があるが、今後も内容が全保護者にわかりやすくなっているかなど、常に細かく考えていく必要がある。 ・コロナウィルスの対応について、緊急、または随時経過報告が必要な時に、

<p>「電話や対面でのコミュニケーション強化」</p>	<p>一斉配信を活用することができた。すぐにはアプリを確認できない方にも、既読確認をして電話連絡をするなど対応することはできたが、いかに迅速に行うかについては改善の余地があるため、次年度に活かしていきたい。コロナウイルス対応について国や道の対応に応じで何度も様々なお願いをしなければならなかったが、迅速に配信する内容、定期的に何度も配信する内容を整理してきたことで、大きな混乱なくご協力いただくことができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・電子化に伴い、保育の見える化を図ってきたが、その分電話やお迎え時の何気ない会話の中で子どもの育ちについて伝え合う「連携」の機会がなくならないように気を付けてきた。保護者の方にも、お迎え時にたくさん先生の声をかけてくれると安心の声を多くいただいた。しかし、コロナ禍のために速やかな降園をお願いしている状況で、十分に話す時間がもてなかったり、クラスによって電話の回数に差があったりしたため、次年度できる限り改善していきたい。
<p>安全管理・危機管理の視点での環境整備の継続 <自己評価 A> 「コロナ禍での危機管理・感染予防」</p> <p>「職員の危機管理意識と子どもたちの危機管理能力」</p> <p>「環境整備の継続」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナに対する感染予防として、日々の消毒や換気・職員の体調管理、密を回避した保育について継続して行ってきた。また、保護者の方に「コロナの影響による園への連絡やお休みが必要な場合」のお願いを何度もさせていただき、1年を通して定着させることができた。保育内容や行事の実施に関しても、国や道の動き、感染状況に合わせてその都度職員間で話し合い、健康と命を守ることを最優先としながらも、乳幼児期に重要な「体験を通した学び」の場を確保できるよう、子どもたちのために可能な範囲で形を変え、実施してきた。保護者の方には以前のように子どもたちの様子を目にする機会が少なくなり、残念な思いをさせてしまったが、この状況で出来る限り実施してきたことに好評のお声を多くいただいた。 ・危機管理としては、コロナ陽性者発生時のマニュアルを作成し、全職員が迅速に役割分断をしながら行動できるようにし、それを生かすことができた。年度途中からは、保健所が濃厚接触者の特定を行わないことになったため、園で「感染の可能性がある方」の特定（市の示す判断基準に基づいたもの）がスムーズに進むよう、3歳以上時のマスク着用をこまめにお願ひしてその有無を記録にとったり、食事時の座席を記録にとったりするなどして、特定や休園の判断をできる限り迅速に行うことができた。 ・安全な環境を整え援助を行うという職員の危機管理意識については、ヒヤリハットを頻繁に報告し、気になったことを職員間でその都度話し合っ改善するなどして基本的に大事にしてきた。一方で、子どもの行動を制限するあまりに、のびのびと身体を動かすことや子どもたち自身の危機管理能力が発揮される場を失うことがないように、どちらも大事にしなが援助を行うように職員の意識を改善してきたところ、それぞれの保育教諭が悩みながらも、どちらも重要視して環境の設定や丁寧な声掛けを行うようになった。 ・今年度は、ガラス飛散防止シートを購入し、防災用品の備えを増やした。また、各クラスに設置しているコロナ感染防止対策のためのパーテーションに加え、移動式のパーテーションを作成し、別の場所でも対応できるようにした。

	次年度以降も、感染対策や災害に対応するための備品や環境整備について、継続して対策を講じていく。
職員間同士の協力、連携の強化 <自己評価 A> 「勤務体形に関わらず全職員で作る協力体制」 「定期的な会議の開催と持ち方の工夫」 「職員間での主体的な話し合いによる子ども理解の連携」	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ感染防止対策のため、積極的に乳幼児の職員が行き来をすることはできなかったが、同じくコロナの影響（お子さんの学校の学級閉鎖等）で欠勤の職員が続いたこともあり、乳幼児関わらず互いに人手不足を埋めることについては臨機応変に対応することができた。また、正職・嘱託・パートの勤務体系による仕事内容の制限をせず、負担が偏りすぎないように工夫したことで、職員の協力体制への意識に変化が見られた。次年度以降、学年や経験年数などにおいても負担が偏ることのないよう、互いにコミュニケーションをとって全職員で積極的に助け合う風土作りを進めていきたい。 ・日々様々な会議が行われるが、参加する人数や内容、目的を整理して実施しなければ、職員の勤務時間に影響することを考慮し、全員で確認すべきことや担当と管理職のみで協議すべきことなどを分けて考え、担任の時間的負担が少なくなるよう工夫して実施することができ、効果的だった。 ・前年度の反省を生かして職員会議を月一回のペースで行い、園としての考え方や子どもの様子を共有したり、疑問や協議事項等を話し合うことができた。毎回ではないが、参加者全員が自分で考え発信できる機会をもつこともできた。しかしまだ十分ではないため、次年度以降はより主体的な話し合いができるよう場や内容の設定において工夫が必要である。 ・認定こども園となってから、2号認定園児に対する職員間の連携が課題となる年が多かったが、今年度は午後の担当職員が子どもたちの様子の情報交換をこまめに行う時間を作り、それを午前中の担当職員と話し、育ちや情報を共有しようという意識が多く見られた。

4 学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

自 己 評 価	A
<ul style="list-style-type: none"> ・今年度もコロナウィルスへの対応を余儀なくされた一年だった。加えて、大雪の影響でバスを運休せざるを得ないなど、通常の保育が困難な日も多くあり、保護者の方々にはたくさんのご理解とご協力をいただいていた。コロナウィルスの感染予防対策で安全を確保する必要性と、子どもたちが様々な体験を通して学ぶ遊びと生活の場を確保することのどちらも重要視して園運営を行ってきたため、感染状況や医学的な考え、国や道の対応が変わるたびに、その都度悩みながらも最善の対応を考えてきた。例年通りではないからこそ、今年度実施した行事や対応等ではより良いものにするための反省点があるが、今年度の経験を必ず次年度に活かしていきたい。陽性者が発生する事態も起きたが、日頃の基本的な感染予防対策を徹底していたこともあり、集団感染となる事態は防ぐことができたため、今後も、長期的にコロナウィルス感染予防対策を継続していく。また、その対応の考え方は今後変化していくと予想されるため、世の中の動きを迅速に把握し、園の主役である子どもたちのことを第一に考え、都度、最善の方法を考えていきたい。 ・令和元年度から学園として始めた ICT システムをより活用し、これまでの課題の背景にあった業務内容の圧迫を改善し、かつ子どもたちの様子を保護者にわかりやすく伝えたり、保護者の負担も減らせるような方法を考え、様々なことを実施してきた。その結果、職員の負担軽減につながったという声が多くあり、業務内容に余裕ができた分、 	

職員間での積極的な連携に対する意識の変化も見られた。保護者との連絡の仕方にも変化があり、便利でわかりやすく記録に残る確実性が増えた分、コロナ禍での対話の難しさ等、課題も残るが、新たな方法に保護者の方からの理解を得て進んできた大きな一歩であったため、今後連携を深めるための具体的な改善点や検討事項につなげていきたい。

・コロナ禍で家庭保育をお願いする期間や通常の保育が困難な時期があった中でも、自然豊かな森を活用し戸外遊びを中心としてきたこと、できる限り食育活動も実施してきたこと、冬の戸外の環境構成についての園内研究を行ったことなどを通して、子どもたちの貴重な遊びと生活の場を確保してできる限りこれまで同様の体験ができるよう工夫することが出来た。その中で、“子ども主体”を意識し深めるきっかけも多くあったため、そのことについて、保育教諭同士で考えを伝え合いやすい職場環境作りを今後も心がけていきたい。

5 今後取り組むべき課題

課題	具体的な取り組み方法
<p>「育ちに合わせた環境構成の工夫」</p> <p>「子どもの主体の保育の共有」</p> <p>「乳幼児の交流や理解」</p> <p>「えほんのおうちの活用」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで計画的に購入してきた玩具を適切な時期に環境として用意することができるよう、子どもの育ちをしっかりと見極める必要があり、そのために職員間で気づきを共有する話し合いや伝え合いの時間や関係性を大事にする。乳児保育室について、少しずつ環境を整えてきたところではあるが、一人ひとりがより安心して生活できる空間づくりや遊びこめる環境づくりの工夫を続けていく。 ・今年度のように、フリーデーを通して戸外遊びの時間を十分に確保しながら、その中で発揮される子どもたちの姿を通して子ども主体の保育や「自然から学ぶ」という建学の精神を全職員が共有できるよう、具体的なエピソードの共有や環境構成の工夫について意見を出し合い、子どもの姿を受けて新たな方法で試すことの繰り返しが日常的にできるようになることを目指していく。 ・次年度も、コロナ禍のために乳幼児交流の制限が予想されるが、互いのリーダー職員同士で子どもの様子を伝え合う機会を設けるなど、職員間で子どもの様子を把握し理解を進めることで、子どもたちが活動の見学などを通して様々な気持ち（憧れの気持ちや思いやりの気持ち）をもてるよう考慮する。 ・今年度増設された「えほんのおうち」について、より子どもたちのためになる活用方法や環境構成を考え、子どもたちにとってさらに「絵本」が身近になるよう工夫していく。
<p>「保護者理解の視点に立った情報提供」</p> <p>「保護者との積極的で丁寧な連携」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ICTシステムやホームページを活用した様々な情報提供が定着した中で、配信した後の保護者の見やすさを考えた提供（データの保存先の統一化など）や、何度も訂正することが無いよう十分な確認をすること、子どもの写真の画質についての改善、全学年の保護者にわかりやすくなっているかの視点での見直し等、今年度の保護者アンケートでいただいたご意見を参考に、より保護者の視点に立った情報提供ができるよう努めていく。また、家庭保育のお願いをしている時期のブログ配信内容については、ご協力いただいているご家庭に配慮した内容としたが、今後も時期に合わせて慎重に内容を検討しながら進めていく。 ・お知らせの一斉配信を活用することで、緊急時（コロナ陽性者発生や大雪でのバス運休についてなど）に迅速に情報提供やお願いの連絡をすることができた。一方で、時間によっては仕事でお知らせを確認できない方もいるため、既読確認をして電話でお知らせし

	<p>たが、その流れがもっとスムーズに進むような仕組みを事前に確立し、丁寧に漏れなく伝わるよう配慮する。また、ICT化によって「連絡」はスムーズになったものの、保護者の思いに丁寧に耳を傾ける「連携」が不十分にならないよう、コロナ禍でも日常的に保護者が相談しやすい雰囲気を作り、連絡事項や表面的なことだけではなく、日常の子どもの成長について丁寧に保護者と語り合えるよう、職員全員が意識して関わっていく。そうして、保護者と園が相互に理解し合える機会の確保を大切に、連携強化や迅速な対応に努めていく。</p>
<p>「コロナ禍での安全管理・危機管理の継続」</p> <p>「安全管理・危機管理の視点での環境整備の継続」</p> <p>「安全を意識することと、子どもたちの主体的な遊びを広げていくことのバランス」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで行ってきて効果的だった基本的な感染予防対策をしっかりと継続していきながら、日々変化する医学的視点や国や道の考え方を踏まえて、今後も柔軟に対応していく。保護者の方に協力していただくことも多くあるが、子どもたちの健康と命を守ることを最優先に考えることと、遊びと生活の場を確保することのどちらも重要視していることを理解していただきながら対応にあたっていきたい。 ・特に森の中は、自然物で作られた遊具ばかりであるため、毎年修繕が必要になる。次年度以降も事故は起こる前の改善を継続していくため、毎日の「ヒヤリハット」を共有する時間の中で気づいた点を挙げられるよう、日頃から安全管理・危機管理意識を高める努力を続けていく。 ・安全面を気にするあまり、遊び場や遊び方が限定されてしまう場面について、今年度様々な気づきがあったため、次年度以降も安全を意識することと子どもたちが主体的にのびのびと遊びを広げていくことのバランスについて、職員が意見を出し合い、柔軟に考えを擦り合わせていけるような場の確保をしていく。
<p>「研修内容について」</p> <p>「参加者を絞り、目的を明確にした会議の開催」</p> <p>「職員間での連携と助け合い」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで学園内で様々な研修を行ってきたが、人材育成や理念の共有のため、その種類や内容、回数などを見直し、より目的を明確にした研修内容を計画的に行っていく。また、これまでも学園内や外部の研修への積極的な参加はできていたものの、学んで終わってしまうことが多く、それを個人の成果としたり、周りに伝えていくことが少なかった。成果を自己他者共に言葉で表せられるような仕組みや配慮、それを共有できるような場作りを工夫して実践していく。 ・今年度は、全正職員による定期的な職員会議を設けたが、業務の忙しい時期になると、疑問点の共有や細やかな話し合いよりも連絡事項が主になることもあった。行事に向けての会議等では、参加者を絞って行ったことが時間的の短縮や意見の出しやすさとして効果的だったことを踏まえ、次年度はリーダー会議や複数担任のクラス会議など、小さな集団での話し合いの場を設け、毎回目的を明確にすることで、理念の共有をしながら互いの意見を理解し合える場作りをしていく。 ・昨年度に引き続きコロナの影響で乳幼児の職員が積極的に行き来をする機会が減り、お互いの業務や子どもたちの把握には至らなかったため、次年度はその点を考慮した職員の配置とし、お互いの業務を助け合い、どのクラスの子どものことも全職員で見るという意識を大事にしていく。 <p>今年度、職務形態に関わらず、全職員が責任をもって子どもを保育するという意識改革が進められたため、次年度も職務形態によって業務内容を限定せずに、協力し合える体制作りを進めていく。また、今年度少しずつ学年の枠を超えて互いに助け合う場面が増えてきたことをきっかけに、次年度も、経験年数や学年によって業務負担感が偏らないようにサポート体制をしっかりと作る共</p>

	<p>に、行事や園運営に関わる様々な業務を担当学年や担当職員のみではなく全職員で効率よく進めていくために、日頃から助け合える風土づくりを進めていく。そうして互いに学び合い刺激を受けることで、職員の働きやすさにつながり、それが子どもたちのより良い成長につながっていくと考える。</p>
--	---